

第三十回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

竹峰 義和著 『〈救済〉のメディアウム ベンヤミン、アドルノ、クルーゲ』

(2016年9月20日 東京大学出版会刊)

竹峰義和 たけみね・よしかず 東京大学大学院総合文化研究科准教授

1974年(昭和49年)10月21日生まれ。43歳。千葉県我孫子市出身。

近現代ドイツ思想、映像文化論

1997年(平成9年)3月、早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。1997年(平成9年)4月、東京大学大学院総合文化研究科修士課程超域文化科学専攻表象文化論コース修士課程入学。1999年(平成11年)4月、東京大学大学院総合文化研究科修士課程超域文化科学専攻表象文化論コース博士課程進学。2001年(平成13年)10月、ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてドイツ・ベルリン自由大学一般比較文学科に留学(～2003年9月)。2004年(平成16年)5月、日本学術振興会特別研究員(～2007年3月)。2007年(平成19年)2月、東京大学大学院総合文化研究科修士課程超域文化科学専攻表象文化論コース博士課程修了。2009年(平成21年)4月、日本大学法学部助教。2011年(平成23年)10月、東京大学大学院総合文化研究科准教授。

主著に『アドルノ、複製技術へのまなざし—〈知覚〉のアクチュアリティ』(青弓社、2007年)。翻訳に、アドルノ『模範像なしに』(みすず書房、2017年)、メニングハウス『生のなかば—ヘルダーリン詩学にまつわる試論』(月曜社、2018年)など。

受賞のことば

学術書を出版しても、大抵の場合ほとんど世間的な反応がなく、拙著『〈救済〉のメディアウム』で扱ったドイツの哲学者アドルノがシェーンベルクの前衛的な作曲活動を評する際にもちいた比喩を借りれば、空壇に手紙を入れて海中に投じる「投壇通信」の営みに似たものがあるとずっと思っていました。ですが、こうして「投壇通信」が無事に開封され、あまつさえ大変な名誉に与ったことに大きな驚きと喜びを感じています。今回の受賞を励みとして、和辻哲郎の名前や歴代の受賞作に恥じないよう、研究者としてよりいっそうの精進を重ねて参る所存です。

《選考委員評》

野家 啓一

竹峰義和氏の受賞作『〈救済〉のメーディウム』は、これまで社会哲学的観点からのみ論じられることの多かったフランクフルト学派の思想について、ベンヤミン-アドルノ-クルーゲという隠れた鉱脈を掘り起こし、その系譜を芸術哲学ならびにメディア論の文脈のなかに位置づけると共に、彼らのアクチュアリティを顕在化させた力作である。

ベンヤミンが複製技術論において、とりわけ無声映画を称揚し、チャップリンの身振りの中に疎外の寓意を、ミッキーマウスにユートピア的ヴィジョンの体現を見ていたことを、著者は丹念な読解を通じて明らかにする。次にアドルノはベンヤミンの議論に呼応する形で、シェーンベルクに代表される現代音楽の存在意義を「断片的芸術作品」という視点から論ずる。その論述は「投壘通信」や「キッチュ」などの逆説的な表現に満ちており、安易な解説を許さないが、著者はそのメタファーを「豊かな美的潜勢力」へと読み換えていく（ただし、第6章のアドルノ擁護は、いささか牽強附会の印象が残る）。最後にアドルノの愛弟子であった映像作家クルーゲが取り上げられ、テレビ番組やDVDの制作など、そのトリックスター的な多面的活動の分析が試みられる。おそらくクルーゲの業績の本格的紹介は初めてのことと思われるが、彼が駆使するモンタージュの技法が「過去と現在との瞬間的接合」と捉え直されることによって、それはベンヤミンの「星座的布置」の概念と共鳴し合い、著者の考察は円環を閉じるのである。

本書は、これまでアドルノからハーバーマスへという展開軸に沿って描かれてきた、フランクフルト学派のイメージを一新した、受賞に値する作品であるが、一つだけ望蜀の言を述べておきたい。それはタイトルに「救済」を掲げ、ユダヤ的メシアニズムへの言及があるにもかかわらず、ベンヤミンとゲルショム・ショーレムとの交流と影響関係について論及されていないことである。この点についてはすでにわが国でも上山安敏、徳永恂、三島憲一らの先行研究があることから、今後の一層の研究の深化を期待したい。

関根 清三

三十周年を迎える和辻哲郎文化賞の歴史に、新たに年若い著者の力作を加え得たことを慶びたい。竹峰義和氏の受賞作の鍵語となる〈救済〉とは、宗教的な概念というよりも、過去に棄て去られた様々なものがはらむ潜勢力を、〈いま・ここ〉に、未来に向けて再生させることを指す。本作はこの概念を導きとして、ベンヤミンからアドルノ、そしてクルーゲに至るフランクフルト学派の思想史的系譜を、言語、芸術作品、映画、イメージといった多彩な媒体(メーディウム)の精細な読み解きを

通して跡づける。そしてその作業を通して、彼らのアクチュアリティを明らかにしていくのである。

フランクフルト学派のこの三人の思想家が、伝統を破壊するような連関の中で「哲学する（フィロゾフィーレン）」多様な試行錯誤の跡を、伝統的で堅実な学術的手法をもって「文献学する（フィロロギーレン）」本書の姿勢は、一方で mismatch のように見えても、他方、面白い化学反応を起こしているようにも見える。

<救済>というメシアニズム的な大仰な言葉をベンヤミンが敢えて用いた深い意図は何なのか、過去のすべての塵芥を救済するのではないとすれば救済の対象はどう選別されるのか、マルクス主義的ユートピアに資するものが選別されるというならば、そのユートピアそれ自身の当否について彼らは、そして著者自身はどう見るのか、海中に投げ入れられた壘の中の手紙という暗喩によってアドルノがシェーンベルクの音楽を、また九時間半にわたる『資本論』をめぐる映像によってクルーゲがマルクスの理論を、上から目線で<救済>することなど企図していなかったとすると、彼らのなしたことをベンヤミン的な意味での<救済>と同断に扱ってよいのか否か、シェーンベルクもマルクスも為政者が葬り去った塵芥と同列に論じ得るのだろうか、ではそれぞれに込められたアクチュアルな潜勢力とは端的に言って何なのか等々について、著者ご自身のフィロゾフィーレンを聞きたい気はする。

しかし問いはむしろ読者に投げかけられ、読者自身のフィロゾフィーレンを挑発してやまないのが、あるいは抑制のきいたフィロロギー研究の端倪すべからざる知略なのかも知れない。なかんずく、絶えず諸事物を解体し、その構成要素を再構成するフィロゾフィーが研究対象となる時に、両者の起こす化学反応の過程に我々は刮目し、思考を揺さぶられる思いがするのである。

黒住 真

竹峰義和『<救済>のメーディウム』は、ドイツのフランクフルト学派の第一次世界大戦後から現代までの思想家から三人ベンヤミン・アドルノ・クルーゲを選んでその内実を捉える。そこに意味ある力動的現実としての「アクチュアリティ」があり、また「メーディウム」という形作られる媒体や断片がある。それは真理内実を求め潜勢力を捉える「救済」である。また暴力や破壊への批判、関係する物事、あるべき労働やユートピアがある。本書はこうした物事を三人の言葉、映画や物語や音楽や、書物・反書物から捉える。

このあたり日本では、戦前に三木清が、「判断力批判」からの構想力の論理を捉え、神話、制度、技術を追ったこと、またその継承者・中井正一が、美学また映画、芸術などを捉えたことに似る。ただ、日本では断片化したまま、総合され持続しない傾向を帯びる。対して本書が捉える思想家は、物象化を捉えながらも、「精神」を見出し、また「死後の生」を再生のように捉える。これは日本の国家とは違って「アクチュアリティ」が理念のように関係し続けていたからかもしれない。

本書では、救済に関わって、ナチスや科学への批判、苦しみを越えた救い、理念のような精神、また本書の言葉では「歴史の廃墟からの星座的布置」がある。このあたりの物事は宗教としてはどうなのか。いくつか示唆を与えるようである。

救済する物事・世界。自然を越える救済においてキリスト教では神の国がイメージされるとともに原罪論が結び付く。ユダヤ系の「解体と再生の遊戯」たる「みずから命を絶った」ベンヤミンはどうか。アドルノは彼を「アナーキズム的なロマン主義」というが、実はアドルノと共に「微かな「希望」が潜んでいる」。またクルーゲはベンヤミンとともに「〈救済〉の瞬間」を志向している。この把握から本書は最後に、三人が「媒体をつうじて〈救済〉の可能性を追求しつづけていた」と結論付ける。

このあたりの救済論は「可能性」を越えて果たして何だったのか。これはメーディウムという物事自体が人々の生死にとって実際に何だったか、ということになる。またその生は「愛」が成り立たせる。三人は男性であり友愛や苦しみをもつが、果たして愛が充実した物事としてあったのか。本書は様々な事実を考えさせる。ドイツを知りヨーロッパを知ることは、手元の日本と東アジアを知ることにもなる。本書は大きな示唆の書といえる。